



発行日 平成28年1月8日

発行者

富山・ミラノデザイン交流倶楽部

高岡市オフィスパーク 5

公益社団法人富山県デザイン協会内

TEL.0766-63-7140

執筆 池田美雪 * ミラノ在住



Expo Milano 2015

2015年5月1日から10月31日まで6ヶ月間(計184日間)、「地球に食料を、生命にエネルギーを」をテーマにミラノ国際博覧会が開催され、世界140ヶ国より計2150万人(1日平均約11万5千人)が来場した。開会直前まで各国のパビリオン建設が急ピッチで進められ、様々な憶測や危惧が報じられたにもかかわらず、目標来場数2千万人を達成し、昨今頻繁に発生するテロリストからの襲撃もなく大成功の内に幕を閉じた。6月から8月にかけての猛暑や、9月・10月に降り続いた雨など、天候に大きく影響されることなく来場者数は日ごとに増加し、10月10日には1日の来場者が27万2785人という最高記録をマークした。

会場内では、54カ国が建設した国ごとのパビリオンと「米」「カカオ」などのテーマで括られた9つのクラスター(房)へ70カ国が参加。60カ国以上から首相を初めとした首脳陣が会場を訪れ、中でも注目を浴びたのはオバマ大統領夫人Michelleの来訪であった。また、イタリア各地からは約200万人の学生がツアーを組んで来場し、地球規模のテーマを多方面から考える機会を得た。一方では、エキスポをよりスムーズに運営させるため、ボランティアを含み約2万人の人たちがパビリオン内の誘導や会場内レストランあるいは清掃などに従事した。

ファッションとデザインそして「食」の街ミラノを訪れた外国からの観光客は、来場者全体の四分の一。ミラノ市の調査によると、博覧会開催期間中にミラノを訪れた国内・国外からの観光客の数は、昨年同時期に対し25%の増加に留まった。イベントに乗じた宿泊料金の値上げが主な原因とされている。

多くの観光客を受け入れる体制の一つとして、イベント開催までに市内の交通機関の整備が完了し、また会場までの交通機関の増便などもなされた。ミラノ市内および近郊では博覧会のテーマにちなみ、関連イベントが連日開催され、イタリアンフードをアピールする絶好の機会として、昨年より700軒近くの新しいレス



4月30日、大聖堂広場で行なわれた、オープニング・セレモニー。



メインゲートでは、食べ物を守る護衛たちの像が入場者を迎える。



コーヒー豆をテーマにしたクラスターでは、エスプレッソの香りが漂っていた。



日刊紙コリエーレ・デッラ・セーラのアートイベントに集まる人たち。

トランやバールなどがオープンしたという。大聖堂広場とスフォルツェスコ城を結ぶ通りなどには万国旗が掲げられ、連日イベントが開催されたエキスポセンターを囲む広場には観光客が溢れ、中心地界隈はまるでテーマパークのような賑わいを見せた。

2014年と2015年に、約6千軒の宿泊施設に滞在した観光客を対象に行なわれた、ミラノに対する評価(TravelAppeal社リサーチ)に関するアンケートによれば、エキスポ開催期間中で高く評価されたのは、街の景観やバリアフリーを含めたミラノ市全体に対する印象ならびに劇場などのプログラムであり、一般的なサービスや宿泊施設に対しては、前年度よりも低い評価となった。

エキスポ会場に対する評価は、全体的な印象として63%の来場者が満足したが、会場へ入るまでの待ち時間が非常に長く、開催期間後半はほとんどのパビリオンへの入場に待ち時間が発生し、その時間が数時間に及ぶケースもあり、会場運営に関しては評価が低くなった。反して、会場への交通機関とパビリオン全体に対する印象については75%前後が満足する結果となった。

個人的にも数日会場を見て回ったが、「食」を全面に押し出し自国の観光アピールを行なうグループと、環境保全や食糧危機への解決策を具体的に提案するグループとに大別される中、各国様々な手法で趣向を凝らし「食」というテーマが含む多種多様な要素にスポットが当てられた、内容の濃い博覧会であったと感じる。

今回のミラノ国際博覧会に関連する様々な側面を振り返れば、2020年開催予定の東京五輪の成功へのヒントが見つけれられるのではないだろうか。

パビリオン・ランキング

開催期間中に連日発信されたエキスポ関連のニュースは、各国パビリオンの魅力についての情報が多くを占めた。開催期間が進むにつれ、エキスポを見て感動したことが口コミやSNSで広がっていき、それに伴ってパビリオンへの入場待ち時間も長くなっていったことを背景に、長時間並んでも価値のあるパビリオン情報が来場者のガイドとしても重宝された。

展示内容の質の高さもさることながら、入場までの待ち時間が長いことでも話題になったパビリオンはまず日本館、次にカザフスタン、サウジアラビア、クエートと続く。最終月の10月には日本館への入場待ち時間は8時間に達したという。。

博覧会閉会式では、BIE(博覧会国際事務局)より、建築要素、環境問題への解決案、国際博覧会の普及活動、この3つのポイントを総合的に評価した複数の賞が授与された。各賞は、2千平米以下のパビリオン、2千平米以上のパビリオン、それぞれのカテゴリーごとに授与された。

2千平米以上のパビリオンのカテゴリーでは、エキシビジョン・デザインが大きく評価され日本館が金賞を受賞(日本館の展示詳細は別の項目で記載)。この部門では韓国とロシアが日本に続いた。また、ドイツはエキスポのテーマをより適切に表現したことが評価され金賞を受賞。最新科学センターとみまがうような細やかな構成により、未来の食物、種の保存、気候と水と地の重要性などのテーマに関連したコンセプトを、大人も子供も魅了するインタラクティブな展示方法やデジタルパネルを用いたゲームで展開。エキスポのテーマ性についてはその他、アンゴラ、カザフスタンが評価された。フランスは、その建築デザインと景観が評価され金賞を受賞。フランス・パビリオン入り口には、ハーブなどの植物を栽培する畑が再現され、パビリオン内に設置された3つの巨大スクリーン上では「いかに世界から飢えを消滅させることができるか」をテーマに、現在の食の状況に対し具体的な解決策を提案したビデオが放映された。フランス国内のリサーチによれば、先進国が日々破棄する食品の量と後進国が必要とする食糧の量がほぼ同じだという。今後、世界から飢えをなくす為に、余剰分を不足している場所へ輸送できる方法を考えよう、という提案は、全ての国が協力すれば実現可能な



大聖堂広場近くのメインストリートは万国旗で飾られ、ストリート・パフォーマーなどを見物する人の波で、連日賑わっていた。



パビリオン・ゼロの展示風景の一部。

解決策である。建築デザイン部門ではバーレーン、中国もフランスに続いて受賞した。

2千平米以下のパビリオンのカテゴリーでは、パビリオン内に完璧な天然の環境を再現した展示内容が評価され、オーストリアが金賞を獲得。なだらかな起伏のある遊歩道を配した小さな森を再現することで、来場者1800人が必要とする酸素62.5kgを再生させ、かつ環境内を一定の温度・湿度に保つことに成功した。この部門では、他にイラン、エストニアが受賞。エキスポのテーマに対しては、バチカン市国が金賞を受賞。床面積25mx5mから成る小さな空間は白い立方体で囲まれ、内部ではルネッサンス時代の画家ティントレットによる「最後の晩餐」やルーベンスの絵画が展示されるなど、キリスト教が世界に向けて発信する救済のメッセージを文化色豊かに表現した。バチカンに続きモナコが銀賞、アイルランドが銅賞を受賞。建築デザインと景観部門では、イギリスが金賞を受賞した。繊細なディテールの美しさがエキスポ開会以前より話題になった建築だが、そのコンセプトは「ミツバチの働き」。ミツバチが受粉を行なうことで自然の相互循環が機能し、我々も存続できることを、エントランスの野生の植物が植えられた庭やミツバチの巣を再現したアルミ製パイプを組み立てたルーフを介して表現。この部門では続いてチリ、チェコが受賞した。



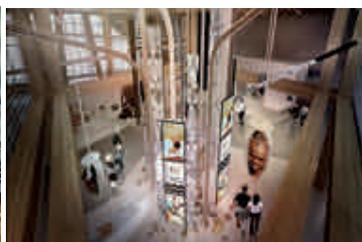
韓国・パビリオン



ロシア・パビリオン



ドイツ・パビリオン



アンゴラ・パビリオン



カザフスタン・パビリオン



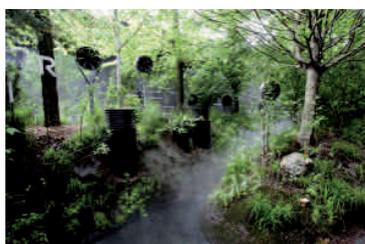
フランス・パビリオン



バーレーン・パビリオン



中国・パビリオン



オーストリア・パビリオン



イラン・パビリオン



エストニア・パビリオン



バチカン・パビリオン



モナコ・パビリオン



アイルランド・パビリオン



イギリス・パビリオン



チリ・パビリオン

日本館

日本館は、伝統と最新テクノロジーを見事に融合させた、最高の展示内容だと各紙で絶賛された。日本のトップレベルのクリエイターたちと最先端技術を絶妙に掛け合わせ、パビリオン全体に込められた創造力は、日本人来場も感嘆するほど素晴らしいものであった。日本館は、多くのパビリオンの中でもドイツ館、スイス館と共に一番早く完成し、イタリア語による「おもてなし」の訓練がミラノ市内のホテルで早々と始められたことでも話題となった。

待ち時間は非常に長いが、一旦アプローチまで辿り着けば、リラックスした雰囲気の中で、展示をよりライブに楽しむためのアプリをダウンロードしたり、ビデオによる日本の食文化の紹介を眺めたり、いよいよこれから中に入れるという期待感が膨らむ。

体験を通して「食を巡る遥かな旅」を来場者へ届けることをコンセプトに構成された展示は、5つのメイン展示室からなり、来場者はグループごとに誘導に従って順次進む形で展示を満喫した。プロローグでは、人と自然の「相生」をテーマに、生と死、光と影をモチーフに、前面のスクリーンに書画と映像が投影され、また、両壁面には浮世絵で「雨の一生」が表現されるなど、あたかも絵巻物のような空間が展開された。ハーモニーでは、自然と寄り添い多様な恵みを育む日本の産地を、コウノトリに誘われて巡る旅で表現。最新の映像技術により幻想的な空間となった。ダイバーシティ(多様性)は、日本の農と食、食文化の多様性とさらなる拡がりをテーマに、日本食に関連する1000のコンテンツを一望できるゾーン。産地から食卓に到るまでの多種多彩なコンテンツが流れ落ちる「ダイバーシティの滝」では、コンテンツに触れるとその関連情報が映し出されるインタラクティブな体験を実現。入館前にダウンロードしたアプリを使い、あたかもメニューをオーダーする感覚でスマートフォンへ次々と保存していく遊びは、来館者が一番楽しんだ場面であった。イノベーションは、地球的課題に対し日本が独創的に取り組む解決策を紹介するフューチャーラボ空間。ラストは、一体感のある観客参加型のショー演出を通して、日本食が世界の人びとを笑顔でつなぐ「地球食」となることを体感できるライブ・パフォーマンス・シアター。来場者1人1人がメディアテーブルに着席し、円形劇場の中心で繰り上げられるキャストによるパフォーマンスと壁面に設置された大型スクリーンの進行で、存分にインタラクティブを楽しんだ。

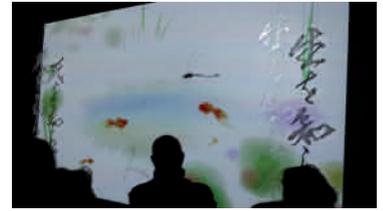
エキスポの参加各国には1日ずつ、国をアピールする日が割り当てられ、日本は7月11日にJAPAN DAYを開催した。「JAPAN DAYスペシャルライブ」では、日本館公式キャラクターのモリゾーとキッコロが司会を務め、吉田兄弟の津軽三味線、日本館の展示クリエイターでもある書道アーティスト紫舟と打打打団天鼓のコラボレーション、KAWAII文化を世界に発信するきゃりーぱみゅぱみゅのパフォーマンス、宝生和英の能舞台がオーディトリウムで繰り上げられた。また、万博会場大通りでは、「東北復興祭りinミラノ万博」と題し、東日本大震災復興を世界各国から支援してくれた人々への感謝を込めて、東北の10のお祭りが披露された。

TOYAMA STYLE(富山県の日)と富山県伝統工芸品展示会

日本館の2階に設けられたイベント広場では、開催期間を通して計35自治体に



日本館への入場を辛抱強く待つ来場者の列。



プロローグの空間で、スクリーンに投影される映像と書画。



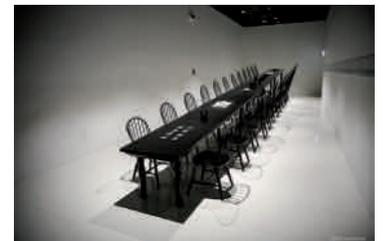
ハーモニーでは、幻想的な映像空間を体験。



滝から流れ落ちてくるコンテンツを開いたり、保存したり。



メイン展示室をつなぐ空間に展示された、多種多様な和食のショーケース。



クールジャパン・ダイニング。



「JAPAN DAY」に、万博会場大通りで催されたイベントの様子。

よる多くのイベントが開催され、老若男女を問わず多数の来場者が日本の多彩な文化を心ゆくまで楽しんだ。

ここでは、8月1日・2日、富山県としては初めてのヨーロッパでの総合的なイベント開催となる「TOYAMA STYLE(富山県の日)」が行なわれ、2日間で3600人の来場者を迎えた。おわら風の盆で幕を明けた2日のウエルカム・イベントでは、主催者を代表して石川県知事より富山県の魅力の数々が語られ、ダイナミックで豊かな自然に育まれた富山文化の映像が紹介された。続いて、ロンバルディア州副知事は、「富山県とロンバルディア州は農業や薬業、文化などの共通点が多く、今後、共通点の多い2つの地域のコラボレーションを実現していきたい。」と挨拶。来場者は、富山PR映像が随時上映される中、越中和紙のワークショップ、越中瀬戸焼や城端絹織物、能作のトークショー、また、ます寿しと細工かまぼこの実演、地酒飲み比べなどに参加し富山県の魅力を堪能した。

エキスポのサテライト会場であるトリエンナーレ・ミュージアムでは、7月31日より8月2日の3日間、「富山県伝統工芸品展示会」が開催され、現地クリエイターやデザイン科学生をはじめ計1000名が来場し、伝統技術を巧みに生かした繊細でデザイン性の高い作品の数々を前に、感嘆の声が聞かれた。

エキスポのロゴとマスコット

エキスポのロゴコンペは2011年、約710名のデザイン学科に在籍する学生と若いクリエイターを対象にして開催された。多くの応募作品の中から最終審査に選ばれた2つの作品の内、一般投票により、相互に絡み合い拡散していく「生命の光」を表現したAndrea Puppaの作品がオフィシャルロゴとして採用された。

発想の原点は、ルネッサンス時代に活躍したレオナルド・ダ・ヴィンチのヴィトルウィルス的人体図。ダ・ヴィンチがこの人体図で表現したように、人類が地球の中心に置かれたミラノ・エキスポのコンセプトの多面性を、シンプルな三原色(赤、青、黄色)を巧みに重ね合わせ、「EXPO」「2015」をグラフィックに表現したことが評価された。

オフィシャル・マスコットはFoody。フルーツと野菜をモチーフにした11体のキャラクターである。マスコット・デザインはディズニー・イタリアが手がけ、その名称はミラノ市内で行なわれたイベント内で、子供たちの投票により決定された。

クロージング・セレモニー

意見の一致や団結が苦手なイタリア国民が、イタリアのシンボルである「食文化」を中心に最大限の力をあわせ、これほど大きなイベントを数えきれないほどの人々を巻き込みながら成功へと導いたことは、イタリア国民自身が驚いた歴史的イベントであった。

クロージング・セレモニーは、10月31日20時30分より、オープン・エア・シアターにて行なわれた。イタリア共和国大統領マッタレラの「ミラノ国際博覧会の閉会を宣言する」を合図に開始され、続いて大統領は「飢えとの戦いは平和を意味する。人類の危機を前に、無駄を生み続けることは受け入れ難いことである。ミラノがこの6ヶ月間に収集した知恵と連帯の証しとして、生命の樹が残されることを祈る」とスピーチし、2017年にエキスポが開催されるカザフスタンの首都アスタナの代表者へ、エキスポの旗を引き継いだ。



提供・富山県
ウエルカム・イベントで富山県の魅力を紹介する石川県知事。



提供・富山県
TOYAMA STYLEを楽しむ来場者たち。



提供・富山県
富山県伝統工芸品展示会の様子。



コンペにより選ばれたAndrea Puppa制作のエキスポ・オフィシャルロゴ。



フルーツと野菜をモチーフにしたキャラクター11体で構成されるFOODY。



クロージング・セレモニーの冒頭で、スピーチを行なうイタリア共和国大統領。



2017年に開催が予定されているアスタナ・エキスポのロゴ。

エキスポがミラノ市へもたらした恩恵

15世紀にレオナルド・ダ・ヴィンチが設計したナヴィリオ地区にある運河Darsenaは、数年前にリニューアル計画が開始され、干上がった川底が長い間むき出しになっていた。工事は遅々として進まなかったのだが、現市長により次々と具体案が可決され、運河を囲む回遊式の公共スペースが誕生した。市営食品市場とレストラン、イベントやエキシビジョンが行なえる屋内・外スペース、水辺の遊歩スペースなどから構成され、訪れる人たちがゆったりと過ごせるスペースでは数々のイベントも催され、いまや新しい観光スポットとして機能している。

エキスポ期間中に特に話題になったのは、市営食品市場Mercato metropolitanoであるが、早朝から深夜まで、1つのスペースに複数の機能(市場、レストラン、イベント会場、テンポラリーショップなど)を持たせ、休みなく集客する運営方法はイタリア各地で波紋を呼び、フィレンツェの市場などが市場の在り方を180度変換させる結果を生んだ。

地球規模の環境保護をテーマの1つとする今回のエキスポを目標に大きな力が注がれたのが、排気ガスを減らす為の市内の交通システムの改善である。ヨーロッパの他の歴史的な街と同様、ミラノは城壁に囲まれた小さな集落から何世紀もかけて発展してきた。幸いにも大きな災害に見舞われることなく昔の町並みが保存されており、何百年も前から使われている狭い道やそれらを基盤に敷設された電车道などが複雑に絡み合っている。こうした条件のもとで公共交通機関を含めた街全体の交通システムを機能させるのは至難の業である。

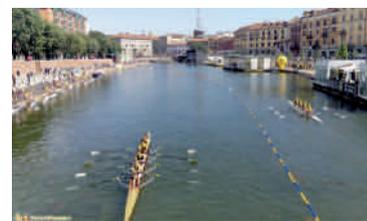
解決策の1つとして注目を浴びたのが、自転車の活用を促進するいくつかのプロジェクト。1つは、エキスポ本会場と市内および各要所を繋ぐ全長180kmの自転車専用レーンの敷設、もう1つはATM(ミラノ・トランスポート社)とミラノ市が共同で運営する、バイク・シェアリングシステム「BikeMi」のパーキングの増設。北欧やイギリス・ドイツなどの主要都市では、自転車の安全性や利便性がたいへん重視され、自動車に代わる生活の足として自転車の利用が定着している。ミラノもそれに続く形で、市内に266カ所のパーキングを設け、市民だけではなく国内外からの観光客への利用を促進している。

今年「BikeMi」の年間使用契約を申し込むと、エキスポ会場入場チケットが1ユーロ(通常チケット価格34ユーロ)で購入できる特典も付けられ、利用者の増加が見られた。

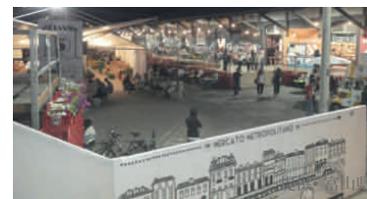
一方、数年前より運転が始まったミラノの4番目の地下鉄線「リツラ(M5)」は、地下でローマ時代の遺跡が見つかるなどして全線開通が遅れていたが、無事に工事が完了し、エキスポ開催までに全ての駅がオープンした。自動無人運転の車両は5分おきに時刻通りに発車し、渋滞や乗り換えなどで煩わされがちな地上の交通機関に代わる主要な線として定着している。

ブームになった滞在方法

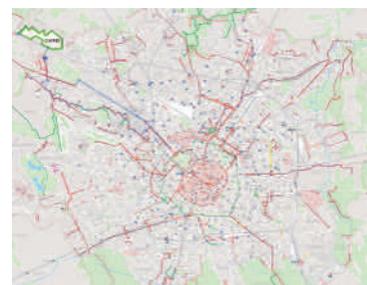
今回、ミラノ市内で際立ってリクエストが増えた滞在方法は、airbnbやWIMDUのコミュニティから提供されるルームレンタルだった。通常の宿泊施設よりも低価格なのが第一の魅力だが、ミラノの住人のもてなしを受け、短い滞在でも街に溶け込むことができるのが人気の秘密である。貸す側も滞在する側も、共にウェブサイトからコミュニティに登録することが条件。システムを利用する度に記録される第3者からのコメントやSNSなどから得られる情報で、お互いに素性を



遊歩スペースに囲まれたDarsenaで行なわれたイベントの様子。



Mercato Metropolitanoでは深夜まで数々のイベントが行なわれた。



全長180kmに及ぶ自転車専用レーンを記した地図。



大聖堂広場に設置された、バイク・シェアリングのパーキング。



ミラノ市内からエキスポ会場を繋ぐ、約8kmのサイクリング・レーンの開通イベントに参加する人たち。



ミラノの北西間を結ぶ自動無人運転の地下鉄車両。

確認した上でレンタル契約を結ぶ。ミラノの中心街やエキスポへ行き易い地域の住人たちは喜んで部屋を提供し、観光客はエキスポ見学も街の観光も目一杯楽しむ為にこのシステムを最大限に利用した。

上記のシステムに比べ利用者は少ないが、家を交換するシステムを提供するhome linkやhome for homeもエキスポ開催期間中人気を集めた。特に7月・8月のバカンスシーズンは、自宅を国外からの観光客と交換し、外国を渡り歩く人々も少なからずいたようだ。

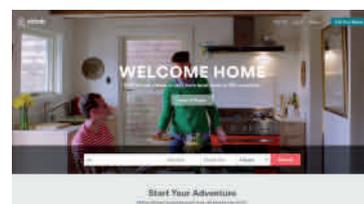
エキスポのテーマの実践

外食で食べきれなかった料理を「お持ち帰り」にするdoggy bagは、日本では割合抵抗無く行なわれているが、実はイタリアではこのような習慣は今まで存在しなかった。豊かな食生活に慣れた国民だからか、おいしい料理が残飯になろうとも気にする気配を見せない人が多いようだ。しかし、この度、世界各地の食料危機の解決に対し大きな関心が寄せられたことで、イタリアの習慣を改善する好機を得たようだ。

Banco alimentare(「食物カウンター」の意味)は、各パビリオンから毎日出される余剰の食材と調理済みの料理を、食事を必要とする人々へ翌朝届けるネットワークとして機能した。会場外では、このネットワークとPAM(国連食物プログラム)、Metroグループが協力し、イタリア国内の飲食店を対象に「Schiscetta reverse(「自宅に持ち帰り弁当」の意味)」運動を開始した。有名シェフClaudio SadlerとパティシエIginio Massariもこのアイデアを後押し、エキスポが終了した現在でも飲食店の参加が続いている。その理由としては、倫理観の共有、レストランが用意しているデザイン性の高い持ち帰り用の箱、また、自宅で料理する時間のない現代社会でこのシステムの実用的な面が喜ばれていること、などが挙げられる。豊かな食生活の中で忘れがちな食べ物への感謝を行動で表し、エキスポが掲げた目標へ一歩近づいた事例と言える。

最後に、ミラノに魅せられたロシア人写真家Yury Sirri Nakvasが、街のいろいろな顔を1分20秒にまとめて紹介する映像作品、どうぞご覧下さい。

リンク: <https://vimeo.com/144621667>



airbnbのホームページ。



デザイン性の高い「お持ち帰り用お弁当箱」。



生まれ変わったミラノの表情をアップテンポで紹介する映像作品。

執筆者 略歴

池田美雪 - インテリアデザイナー

武蔵野美術大学基礎デザイン学科を卒業後、1994年よりミラノ在住。

1997年にIstituto Europeo di Design 建築インテリア科を卒業した後、個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わる。

また、「do it jubunde」展(無印良品、ニコレッタ・ブランヅィとのコラボレーション)を企画ならび実現

”Soundesign”展(Marangoniファッションスクール主催)にて弦楽器”Caravantar”を発表

写真雑誌“ZOOM”日本版のコーディネイト、翻訳 など

“TuPlay”展にてグラス楽器”FASOLA”を発表

「Bicarbonato : mille usi per te e la tua casa」執筆 (FAG出版社より)

(イタリアの生活に密着した重曹の活用方法を書き綴った本)

“B.A.C.”展(City Art ギャラリー)にて、インスタレーション”Ma.Ma.Ma”を発表

“Made in Bovisa”(Bodio小学校の子供たちとのプロジェクト)を起案、コーディネイト

現在、クリエイティブ・コンサルティング会社(デジタルゲーム、ウェブサイト、グラフィックデザイン)の共同経営者として活動し、また、デザイン・アートに関するコーディネイト、翻訳および通訳、日本とイタリアの文化交流を推進するデザイン・プロジェクト”stu-art”コーディネーターなどを手がけている。